

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 多羅尾歩

多羅尾歩氏の博士学位申請論文『樋口一葉という〈狂愚〉—近代日本からの逸脱—』をめぐる公開審査は、平成25年6月25日に行われた。多羅尾氏の論文は、明治二十年代までに確立された、近代天皇制における「正統性」としての、家族から村落共同体を媒介として都市へ出て、国家的機構に参加することで天皇への忠義をつくすという立身出世主義から、樋口一葉の文学がことごとく逸脱することを明らかにした。

樋口一葉が小説を発表したのは、日清戦争前後のきわめて限られた短い時期であった。多羅尾氏の論文ではこの時期を、大日本帝国憲法下における中央集権国家体制が確立し、資本の本源的蓄積過程も終了し本格的な資本主義体制となり、教育勅語の下での国民教化装置の完成に伴い立身出世志向が人々の中に深く浸透していく歴史過程として位置づけた。

こうした時代状況の中で発表された二十二篇の樋口一葉の小説テキストは、近代国民国家の「正統性」の枠組から排除されたり、みずから逸脱者たちを描いた、きわめて特異な文学であることを多羅尾氏は本論文で明らかにした。

第一章では文壇デビュー作である『うもれ木』を対象とし、自身の美術制作によって立身出世と報国を実現しようとした男性主人公が、「万国博覧会」出展用の作品をみずから毀損する過程を描いた物語として位置づけることによって、同時代の「正統性」に対する懐疑が認められることを指摘した。

第二章では日清戦争中に執筆された『暗夜』を対象とし、戦時下において正統的な女性国民像の一つの代表とされた篤志看護婦と美子皇后の活字メディアの中での表象とを比較分析することによって、両者の「正統性」が内在させている虚構の構造を分析した。とりわけ女性主人公が明治社会そのものと対峙する姿勢に、同時代の女性規範からの著しい逸脱を提示してみせる多羅尾氏の論理には強い説得力が認められる。

『にぎりえ』を論じた第三章においては、娼婦であるお力に、全財産を投入して破綻した源七の布団屋という職業が、日清戦争前後においてどのような位置にあったかを明らかにすることによって、二人の関係性について「経済的論理を体現」するものとして位置づける新しい論点を提示し、それを証明した。

第四章では『わかれ道』を分析対象とし、立身出世から疎外された矮小な身体を持つ孤児の少年と、苛酷な賃労働から「妾」に転身する女性との交情と惜別を、日本資本主義確立期の性規範と労働規範からの逸脱の物語としてとらえ直している。

第五章は『われから』における富裕な女性主人公の心情と行動を、同時代に規範的な「主婦」像からことごとく逸脱するものとしてとらえ直し、第六章ではこうした一葉の小説の主人公たちの在り方が幕末維新时期から明治二十年代の、吉田松陰、田岡嶺雲、星野天知、北村透谷、戸川秋骨等の「狂愚」の思想の系譜に位置づけられることを証明した。

終章では永井荷風の『里の今昔』を参照しながら、一葉の代表作『たけくらべ』を、一九四五年の敗戦経験まで引き付け、「文明開化」「富国強兵」といった、明治から昭和にいたる近代天皇制の下での「正統性」の在り方を批判しつくした小説として分析し、樋口一葉の文学作品の現代的機能を明

らかにした。

多羅尾歩氏の学位申請論文では、日清戦争前後の明治日本において、圧倒的多数の人々が内面化していた、立身出世主義的な上昇志向と、その欲望に天皇の権威によって普遍的な意味を与えた同時代の男性作家による文学に対し、樋口一葉の小説が社会階層を転落していく者たちを造形し、こうした価値体系全体を批判的に相対化した文学テキストであることを、精緻な表現分析によって証明した。

多羅尾氏の小説の表現分析は、樋口一葉の小説が舞台として設定した、国民国家の「正統性」の埒外に排除された、社会の最低辺の場所をめぐる、詳細な同時代コンテクストの調査分析によって支えられている。最低辺の人々の職業、その仕事の同時代の経済システムの中での位置、日清戦争の前と最中と後における同じ仕事の量的質的变化など、これまでの樋口一葉研究の水準を大きく前へ進める、周到な資料調査とその分析が、本論文におけるすべての中心的論点に即して実践されている。

これまでの樋口一葉研究では、一葉が女性作家であるということに特別な意味が付与されてきた。これに対して多羅尾氏は、「狂愚」という概念によって、社会体制の中で構築された「正統性」を批判し、意識的に体制の枠組の外へ逸脱していこうとする吉田松陰以来の思想的系譜の中に一葉を位置づけ直すことに成功している。このことによって、一葉の小説の女性主人公だけでなく、男性登場人物のそれぞれに固有な、社会的「正統性」からの逸脱の局面が、各論において詳細に明らかにされ、論文全体を貫く論旨となっている。

審査の過程においては、終章の『たけくらべ』分析を永井荷風にたよるのではなく、独自の論をより前面に押し出すべきではないか、「狂愚」などの限定された概念に一葉の小説を囲い込むのではない方法で、より豊かな一葉小説の読み方の可能性を示すことができたのではないか、などの批判もされた。

しかし多羅尾歩氏の学位申請論文は、樋口一葉の小説研究として、多くの新しい知見と論点を提示したばかりでなく、日清戦争前後の明治日本社会についての、政治史的分析、経済史的分析、社会史的分析、思想史的分析においても、すぐれた史料調査に裏づけられた実証的であると同時に、理論的にも新しい方向性を示していることが審査の過程で明確になった。以上のことから、多羅尾歩氏の論文が学位申請論文として、十分ふさわしいものであるという点で、審査委員全員が合意した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。